Map23 奄美群島の環境文化 集落景観

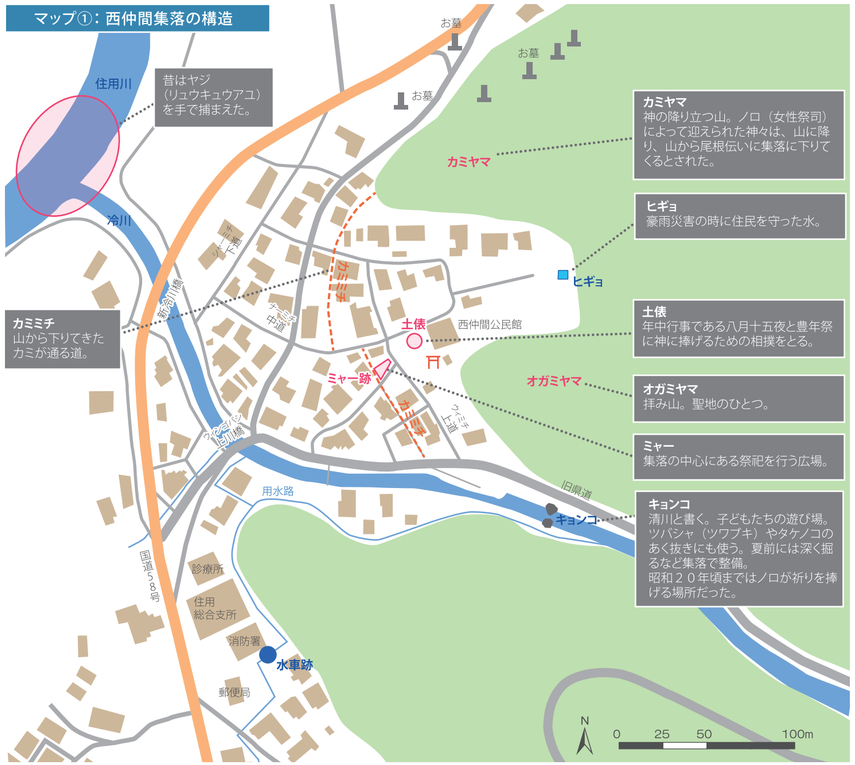
奄美群島では、集落を「シマ」と呼び、シマごとに、言葉や習俗が異なり独自の方言やシマ唄が残るなど、多様な文化が見られます。集落景観にもこれらの文化、信仰、自然観などが色濃く反映されています。

奄美群島の人々の暮らしは周辺の自然と密接に関わっており、集落の前面の海や付近の川で魚介類を採取し、川で生活用品などを洗い、背後の山野で田畑を開墾したり薪や材木を刈りだしたりと、集落が周囲の海、川、山と一体となった生活を営んできたことが分かります。

海の彼方には神々のいるネリヤ・カナヤ（ナルコ・テルコ、リュウグウ）と呼ばれる理想郷があり、豊穣や災害をもたらすと信じられています。琉球国統治時代には、神々を迎え、送り出す祭事や農耕儀礼、年中行事を司るノロ制度ができ、今でもその頃からの行事や芸能が各地に伝わっています。ノロによって迎えられた神々は山に降り、山から尾根伝いに集落に下りてくるとされており、カミミチ（山から下りてきた神が通る道）、ミャー（集落の中心にある祭祀などを行う広場）など、ノロ祭祀を基軸に聖地を骨格として集落空間の整備が行われました。ノロ祭祀が行われていた奄美群島から沖縄諸島にかけて、同様の集落空間が広く認められます。

妖怪「ケンムン」や山の神との遭遇体験、聖なる空間の存在などは、宗教的習俗的な意味に加えて、過大な開発を抑止して災害などからの安全性を維持するための仕掛けであり、自然の恵みを持続的に得られるようにするための知恵でもあったと思われます。昔からの習慣や伝承を大切にして生活してきたことが、小さな島の自然や生きものを守ることとなり、結果的に国立公園や世界自然遺産として価値が認められることにつながったとも言えます。

マップ①：西仲間集落の構造



［出典］
・環境省　「平成25年度　地域の環境文化に依拠した世界自然遺産のあり方に関する調査検討業務報告書」(2013)
・住用村誌編集委員会編・発行「わきゃシマぬあゆみ（住用村の歴史と暮らし）第一集」(2005)
・陰影　基盤地図情報数値標高モデル10mメッシュ（標高）より作成
・背景図　地理院タイル（淡色地図）

マップ 23 は、2013 年に環境省と鹿児島大学が、NPO 法人すみようヤムラランドと連携して行った聞取り調査の結果をまとめたものです。マップ①はモデル地区となった奄美大島の西仲間集落（奄美市住用町）の内部について、マップ②は西中間集落周辺における自然利用についてまとめています。

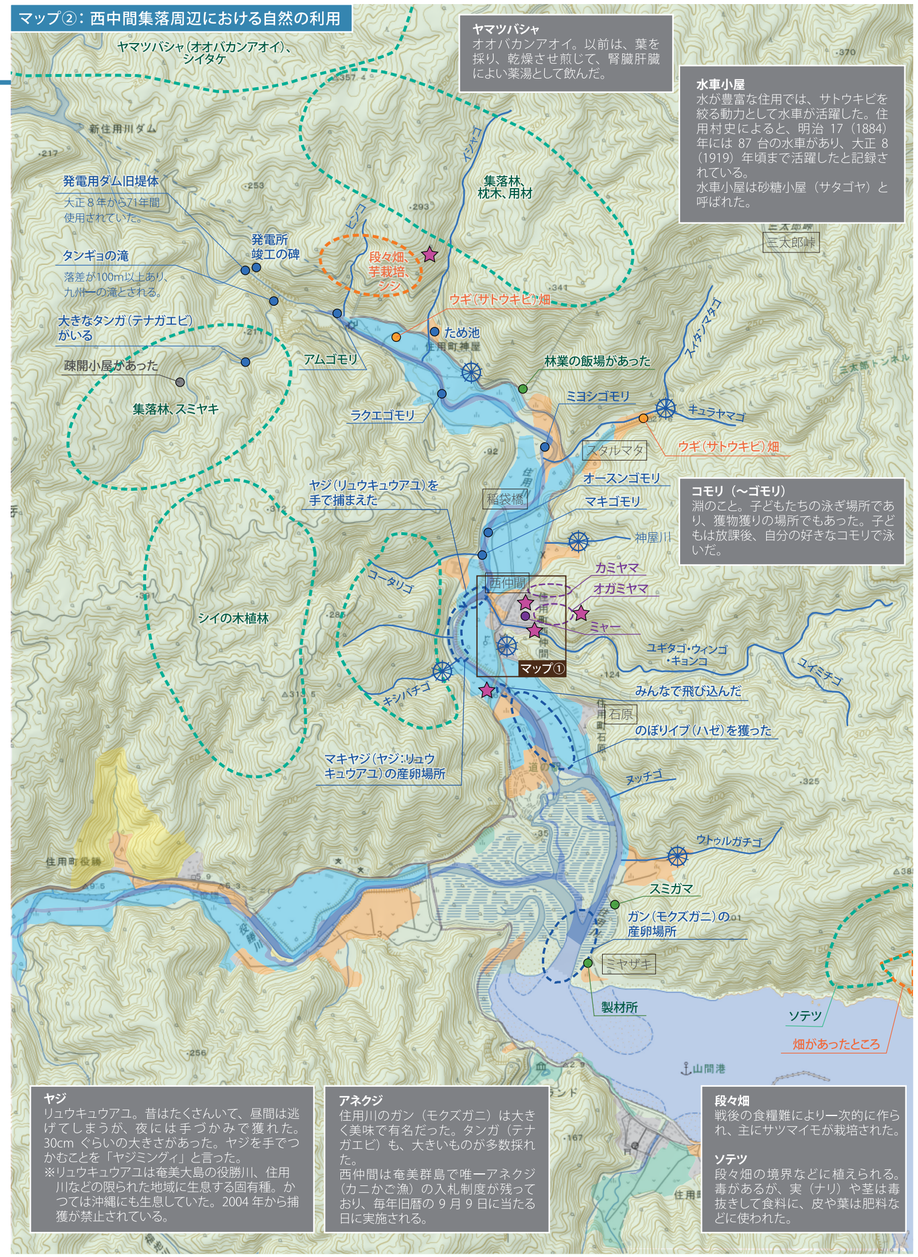
西仲間集落の集落景観を形作る集落空間の構造は、琉球国統治時代に成立したノロ祭祀を基軸に、聖地を骨格としたものです。

西仲間の集落は、山を背に、大きな河川（住用川）に面しています。シマの背後にはカミヤマ（神山）、オガミヤマ（拝み山）、シマの中心にはミャーがあり、カミミチ（神道）が通っています。

カミヤマ、オガミヤマ、カミミチは聖なる空間とされ、普段は立入りなどが制限されていました。こうした場所は今でも大切にされています。

［参考］
・宋 多情「奄美市住用町における自然利用の変化と住民意識」島嶼研究 第 22 巻 2 号 The Journal of Island Studies, Vol. 22 No. 2 (2021)

マップ②：西中間集落周辺における自然の利用



自然はみんなのもの

集落林に代表されるように、シマの自然資源は誰が採ってもよい共有のものでした。聞取調査でも、以下のような自然を共有財産と捉える発言が記録されています。

「川や山でとったものは売らずに（自分だけの利益にせず）親戚や大切な人に贈る」

「（全て採り切らず）次の人のために残しておく」

自然に対する畏怖

ケンムンなどの怪異にはその時代の社会・文化的な世界観が現れるものであり、ケンムンは奄美文化が具現化したものと言えます。

ケンムンの言い伝えによる出没地は、シマ（集落）の境界、シマと山の境界に多く見られます。海や山などでの採集活動の際に遭遇する事例も多くあり、自然資源の利用との関連が示唆されます。

凡例

聞取り調査で明らかになった人と自然とのかかわり

- ケンムン出没地
- 水車小屋
- 森のかかわり
- 水のかかわり
- 神のかかわり
- 農のかかわり
- その他

土地利用（1956年）

- 水田
- 乾田
- 畑
- 森林
- 荒地
- 道路
- 集落
- 自然裸地
- 河川
- 支川

※土地利用区分は昭和 31 年測量 2 万 5 千分の 1 地形図に基づく

＊測量法に基づく国土地理院長承認（使用）　R 5JHs 80